江戸名所圖會

九 9

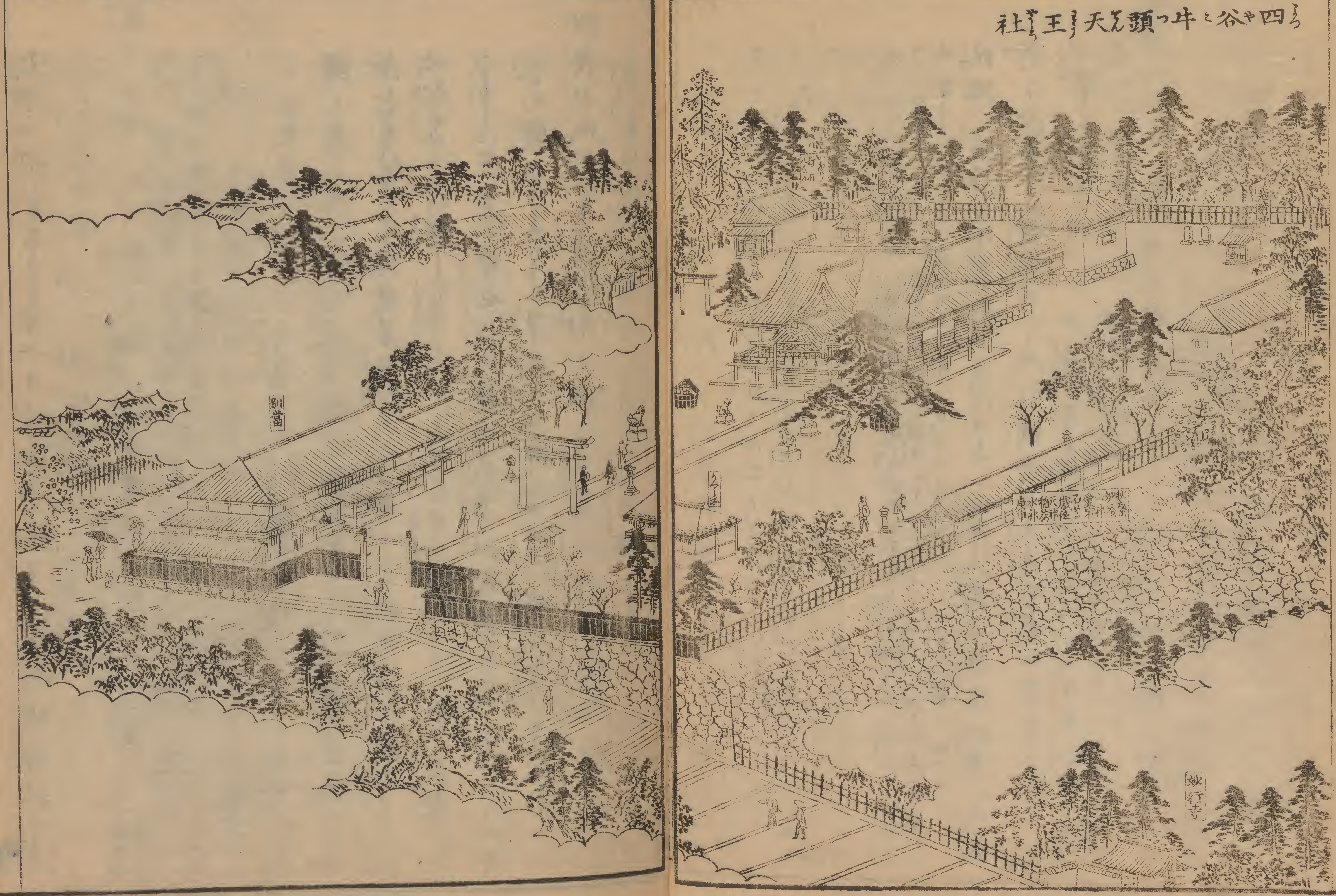
四谷　四谷御門の外より西の方内藤新宿のあたり迄の惣名之里

老云此地の四方に谷あり故に四谷と号くると　南向亭云く昔麹町六七丁目の地と塩町辺の地に谷有しが寛永十三年外廓営造の時御堀の揚土を以て東西の両谷を埋めける故に平地となりしかど旧名ハうしなはずして塩町の入口を今も坂町と字せる其故ハ此又古へ坂多く有りし頃ハ民家一軒ありて夫婦くらしの人居住せし故に夫婦坂と唱しと云く　或人云れハ入国の頃ハ今の糀町両側番町永田町に至迄本多弥八郎高木九助両家の下屋敷として下し置れしが共御城近なるにより市谷の臺此原を永代の御諚なく下しあふ表四百八十間に只四人指置られしがあり四家とよへりと

此地ハ永禄の頃霞村とよひたると云傳ふ或云往古此地ハ武蔵野に續きし曠原なれバ此所彼所に土民の家四家ありし故四家と云へり共いふ　事跡合考に往古今の尾州公御屋敷表門の地及び坂町其余二所共に民家四軒ありしなり鳴子高井戸の方より四ッ家と称して往来にやすらひしとあり

牛頭天王社　同所傳馬町一丁目二丁目の間の左側の横小路を入て二丁許も西にあり　故に俗字して此小路を天王横町といふ　祭神素盞鳴尊　本地佛ハ薬師弘法作　本は四谷の人家開けくるよりの産土神とすと　神主ハ芝崎氏　神田明神の神主也　別當を寶藏院と云　号を真言宗中野寶仙寺の末　祭禮ハ毎歳六月十八日同所石切町　傳馬町一丁目の横町をと云

四谷牛頭天王社



旅所へ神幸ありて廿一日帰輿を地主ハ稲荷明神にして共に此地の産土神と崇む 本地十一面観音 行基大士の作之

鬼子母神 同所坂の下南寺町日蓮宗日宗寺に安置せり 当寺旧地糀町清水谷に在て乗蓮寺と号を此地へうつされて後藤堂大学頭高次の室高見院心月日宗大姉の法号を採て山を高見と号し寺を日宗と唱へ其家より寺院再興あり 本尊鬼子母神の像ハ日法上人の彫像なりと相伝ふ

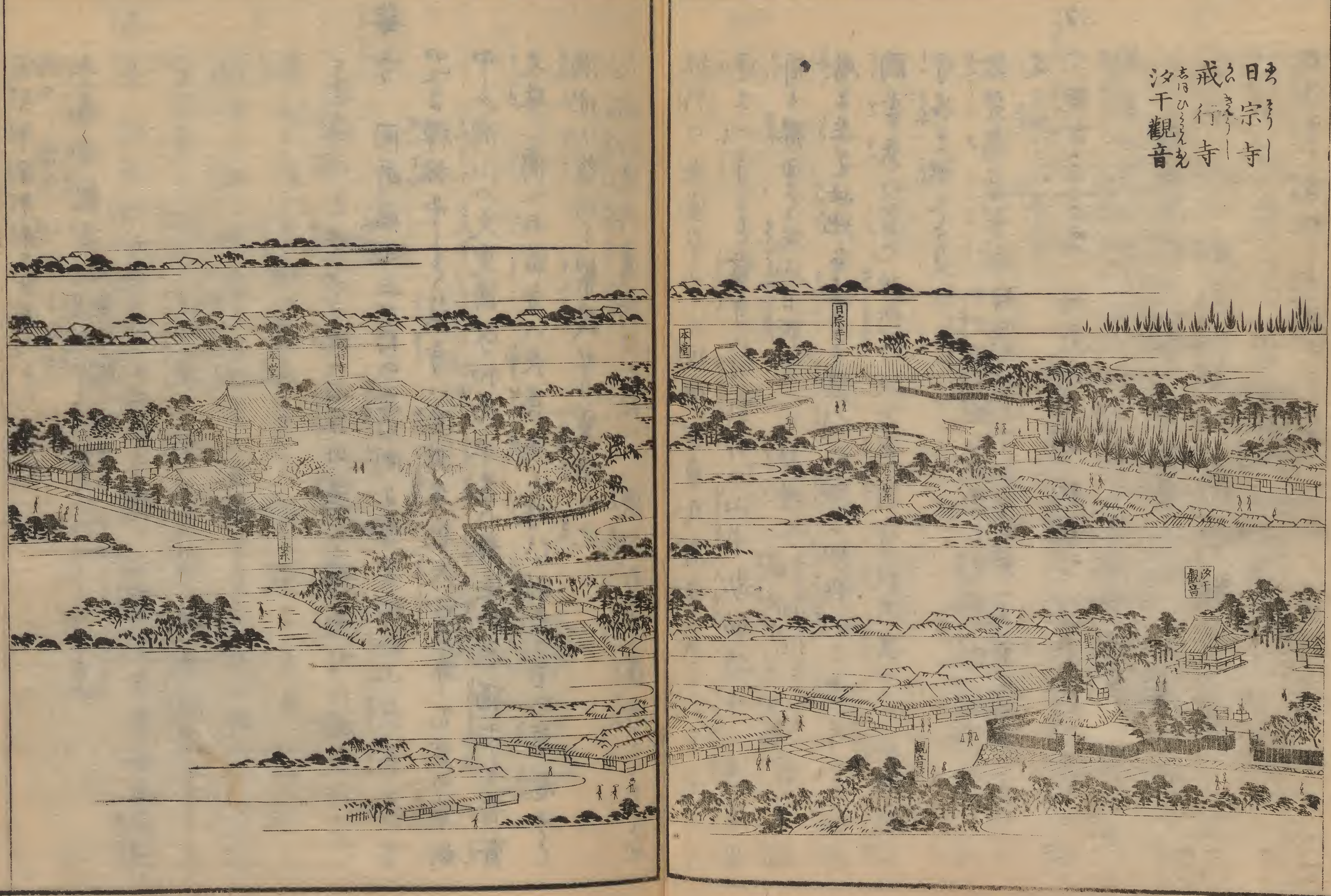
文永元年十月三日日蓮上人四十三才母君を拝せんとし旧里安房国小湊に帰る母君悦の餘り頓死を上人大に歎て生活の祈念をせんとして先徒弟日法上人に命して此本尊を造らしむ 依此本尊に祈願し甚ふ験ありて其暁蘇生しあふ後寿を保つ事四年あり鎌倉住人鐵田氏某此霊像を傳来せしが本尊の霊示によりて享保十三年当寺に安し奉るとぞ

妙典山戒行寺 同所南に隣る日蓮宗にして延山に属せり 寛永の頃迄ハ糀町一丁目の御堀端にありて常唱題目修行の庵室なりしを近隣宮重氏庵主と共に力を合せて遂に一寺となし当寺の日貞師ハ山本勘助晴幸入道道鬼斎か孫にて延山日悦上人の徒弟也 寛保中八十余歳遷化せしとぞ 当寺ハ明暦に至て此地に遷さる總門の額に妙典山と書せしハ朝鮮国李彦の書也 此所の坂を戒行寺坂又其下の谷を戒行寺谷と唱へたり

分身鬼子母神 寺中圓立院に安置せり定朝の作也始四谷北伊賀町永田安節といふ医師の家に傳来せしを来由ハ長けれハ爰に略して記さず

汐干観世音菩薩 同所南寺町戒行寺の裏の坂口真言宗錦敬山真成院にあり此本尊ハ越後国村上義清か守佛にして其末流村上兵部入道道楽斎大坂御陣の時上杉景勝に従ひ奥州米沢より彼地に趣く後江戸に帰りて当寺に収むるといへり 或人云く此本尊ハ塩踏観世音と号く村上天皇護身の尊像なり依て村上越後守頼清常に崇信し其後堂宇を造りて安置せり大坂御陣のころより村上

日宗寺
戒行寺
汐干観音



覚玄斎當寺第三世看心に擬与し當寺に安すとなり
本尊聖観音作者詳ならず一尺斗の石の上に立せ給ふ此臺石潮の盈虚に八ツ湿ることなり

忍原 同所四谷通りの小名なり傳へ云寛永十年癸酉武州忍の城を松平豆州侯に賜ふ其頃ハ御番城なりしかハ勤番の面々御家人を江戸へ召帰されし此地に拝領の宅地を賜ふされと其頃ハ廣原なりし故に字に忍原とそ呼しと也忍川と唱ふる地ハ四谷の通り傳馬町の西にあり

篠寺 同所塩町三丁目の左の側に有て四谷山長善寺と号する禪林なり篠寺ハ其異名也天正三年乙亥の草創にして開山ハ文叟麟学和尚本尊ハ釋迦如来脇士ハ文殊普賢なり傳へ云當寺ハ長善庵と呼ひ形ちかりの草庵なりしか満地小篠のミ繁茂せり寛永の比大樹此邊御鷹狩のとき厳命ありて篠寺とよませ

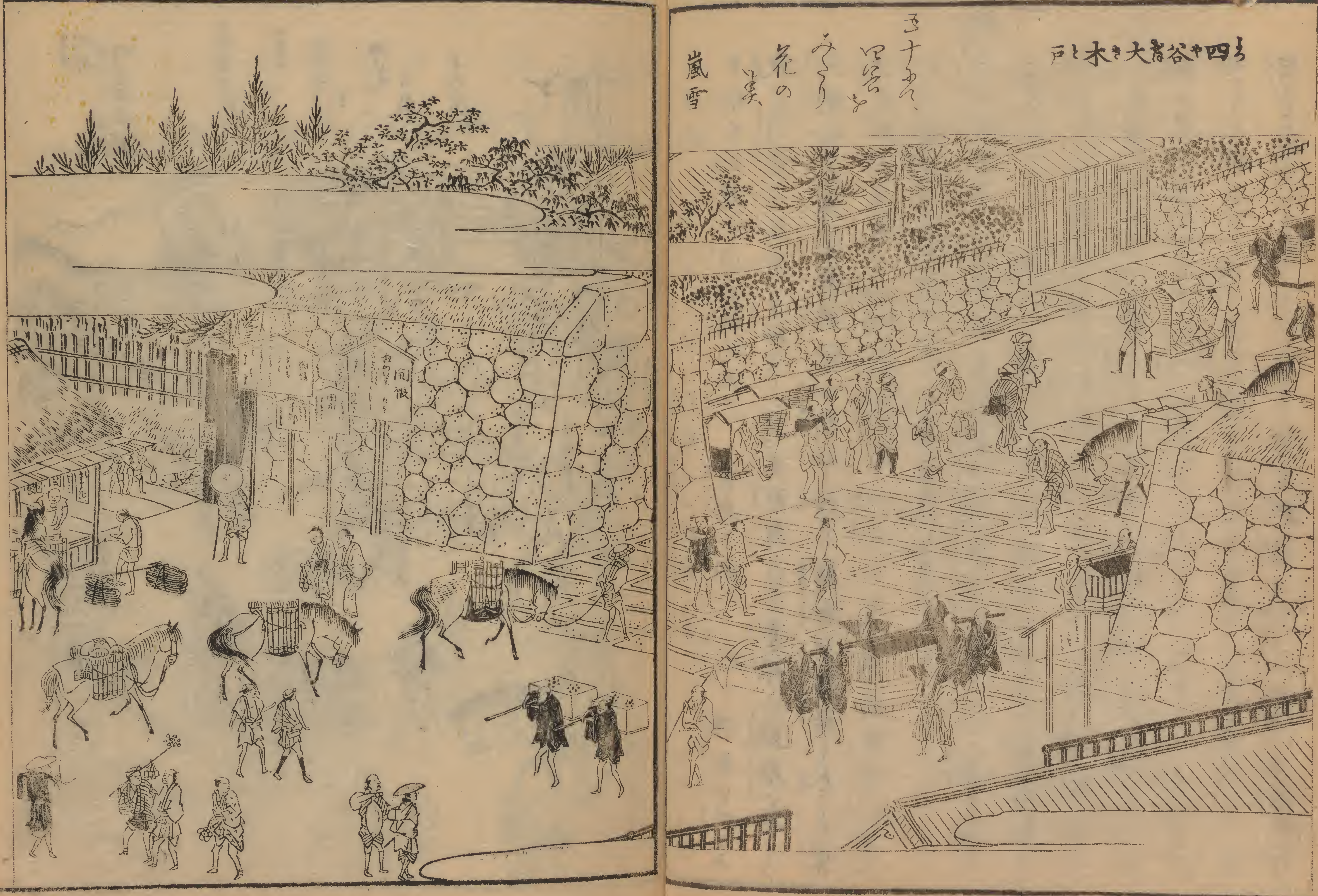
なし此地を寺境となすより後此名あり故に其證として今も
堂前に方三尺斗の地に小篠の隈なし總門の額に笹寺と書せしハ永平寺兼天和尚の筆なり

四谷大木戸 又大関戸に作る 甲州及ひ青梅への街道なり土俗云霞か関或ハ旭の関など云とぞ御入國の頃迄ハ此地の左右ハ谷にて一筋道なり此關にて往還の人を糺問せらる近頃まで江戸より附出を駄賃馬の荷物送状なきを通さゞりしとなり今も猶駄賃馬の荷鞍なきをハ江戸宿又ハ荷問屋等にて手形を出して通らるゝ其遺風なり此故にやあらん番屋八町の持なれど突棒指股鋏などを飾置て是往古關のありし時の遺風なりとぞ又同所西の方に往還の道を横ぎりて石橋あり下を右へ流るゝ小溝を櫻川とよへり

内藤新宿 甲州街道の官驛なり 此地ハ旧内藤家の第宅の地なりしが後町屋となる故に名とす

日本橋より高井土迄の行程凡四里餘なりしかバ人馬共に労を依て元禄の頃此地の土人 官府に訴へて新に驛舎を取立る故に新宿の名有り然るに故有りて享保の始廃亡せしが又明和九年壬辰再ひ公許を得て驛舎を再與し今に繁昌の地となれり 此所より高井戸へ一里廿五町あり 追分といふハ同所甲州街道八王子通及ひ青梅への分道あれバなり

霞関山大宗寺 内藤新宿右側中程大木戸より二丁餘西に有り浄土宗にして縁山に属せり本尊ハ阿弥陀如来にして恵心僧都の作開山念誉故心学玄和尚と号す昔ハいさゝかなる草菴なりしを寛永の頃内藤大和守重頼此地を賜りし時此地に住る道心者ありしに重頼若干の地を与へられしかバ廣豁なるを以て大宗なりと云しかハ重頼とりあへずさあらんにハ寺号を大宗と付よとありしより号とすと當寺牌堂の本尊弥陀善逝の像ハ


四谷大木戸
五十三ゝ四谷をみくり花の実
嵐雪

四谷内藤新驛
節季候の来てハ風雅も師走かな
はせを
水

鎌倉佛師の作なりといへり 齊藤伊勢守二親菩提の為と記してありとぞ此斉藤といへるは代々鎌倉に仕へし斉藤禅門浄圓が裔 門の内に沙門正元坊が造立せる所の銅像の地蔵尊あり ありといへり江戸六地蔵の第二番目なり

護本山天龍寺 同所追分より南の方甲州街道北左にあり濟家の禅崖にして本尊千手観音開山は春屋和尚なり當寺其先は遠州の天龍川の辺にありしを後江戸に遷し牛込にありしが天和三年癸亥二月十六日火災にかゝり竟に此地に移されたり 延宝の江戸図に依て考ふるに今の牛込徒歩町の西馬場のある地其旧跡にして今も元天竜寺前といへり 境内に地蔵堂と観音堂有り又構の内に一里塚有り

鮫河橋 紀州公御中館の後西南の方坂の下を流るゝ小溝に架せるを云今此辺の惣名となれり里諺に昔此地海につゞきたりしかば鮫のあがりしゆゑ名とせしといへり証とするにたらん 或人云く天和二年公家の記録に上一木村鮫が橋とありと云々然る時は此辺も一木の内なりと知れし又佐目河に作る千駄ヶ谷寂光寺鐘の銘に鮫が村ともあり

権太原
長禪寺

鳥の跡

さひしさやなれしちとせを契りせハ何かハんをかくるあらまし　茂睡

永固山一行院　鮫河橋の西の方千日谷に在て浄土宗なり開山ハ源蓮社本誉利覚和尚といふ慶長年間草創を昔ハ僅の草庵なりしを永井家開基して一宇の浄刹となし開山利覚和尚ハ則永井信濃守尚政に仕へたるが剃染して此地に庵をむすひ千日の間常行念佛をなす結願の時千日不退轉の回向を勤む依て道俗群集せしより千日寺と云唱へ又此所を千日谷と呼ぶとなり　紫の一本といへる冊子にさめが橋を渡て信濃原へ行谷を千日谷といふとあり永井家の屋敷あるゆゑなるべし今ハ信濃町といひ又永井原とも云と云々

阿弥陀佛銅像　権太原浄家長禪寺境内に在り高さ五尺なるも佛像の脊に應永十四年丁亥八月廿五日と彫付てあり旧東本願寺の佛なりし大坂の御城内にありしを寛永の頃江戸に移し當寺に安置せり

千駄谷（せんだがや）
大神宮（だいじんぐう）
寂光寺（じやくくわうじ）
本社
本堂

按に應永十四年ハ足利将軍義持の時世なり佛躯にかくるに穴あり疑ふらくハ昔兵乱の時に損せしものならん歟

吾妻堤　同所にあり往古の街道の餘波なりとぞ堤の形今も僅に残れり

太神宮　同所御焔硝倉の西の方に有り相傳ふ萬治年間関東大に疫疾流行を冨士の根方より神送りしきたり此地に祭りぬ然るに其神輿の中に太神宮の御祓有り依て此地鎮護の為同所八幡宮の地に祠を建て是を勧請す後此地にうつせしとぞ（神主ハ小川氏なり）

遊女の松　同所西に隣る天台宗寂光寺の境地に有り當寺昔ハ麹町の貝塚の地にありしを御城廓御造営の時此地にうつれり（始ハ日蓮宗なりしを元禄の頃天台宗に改む今の開基ハ自證大僧都圓雄師なり）相傳ふ此地ハ往古の奥州街道にして廣野の原野なりしに此松樹の鬱蒼として栄茂し遠く見え渡りし故に霞の松と号しを寛永の頃　大樹此地に御放鷹の時に鷹翦て御氣色ありしにより此松に因りて御拳に止る故に御褒賞として其御鷹の名を此松に命せられしと遊女と唱へし[illegible]となり

新日暮里　同所二丁ばかり西南の小川を隔て法雲山仙寿院といふ日蓮宗の寺にて庭をかまへ此辺の地勢をよひ寺院の林泉の趣谷中日暮里に似て頗る美観より故に日暮里と相對して假初に新日暮と字せり弥生の頃爛慢たる花の盛りには大に群集せり當寺ハ紀州公御母堂養珠院日心大姉正保紀元甲申草創あり當寺の鬼子母神ハ同大姉甲の延嶺にして霊示を感し大野の辺にて土中に得られて後當寺開創落成の日安置ありしとかや　同所一町ばかり東南龍岩寺といへる済家の禅宗の寺の庭中に笠松と称するあり枝のまはり三間あまりにおよべり

仙寿院庭中

竜岩寺庭中
笠松

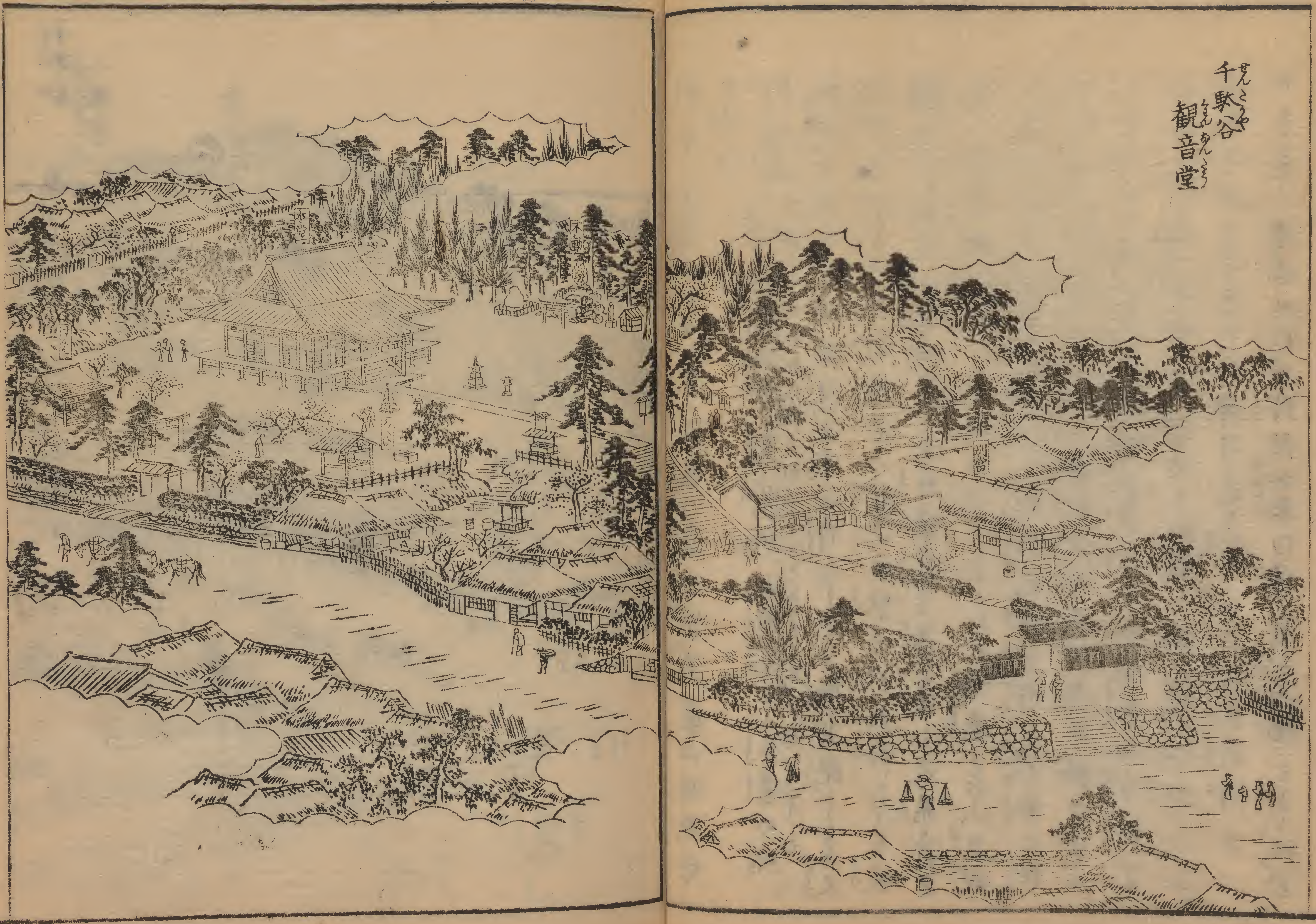
千駄ヶ谷観音堂　寂光寺より二町ばかり西北の方にあり観谷山聖輪寺と号する真言宗の寺に安置す本尊如意輪観音ハ当寺開山行基大士の彫像にして御丈三尺五寸あり世俗目玉の観音と字しまゐる 往古慶長三年の春盗賊来り此本尊の玉眼ハ精金なりと突傍へ鑿をもつて去んとせしが冥罰にやよりけん自ら持る所の鑿に貫れて死せり此地の高橋氏某目のあくり是をとらく驚歎し堂宇を再興す此故に里民目玉の観音と字したてまつりしかゝる縁起によるに菊岡沾涼翁の説に江戸寺院の中千有余歳を歴る所そのほかに浅草寺と当寺とのみといへり

縁起曰神亀二年乙丑行基大士東国遊化の頃同年初夏に暫く此地に息ひ給ふ時に如意輪観世音傍の谷より出現し給ひ大士に霊示あり依て仏意に応じかしこにありし古株を仏材として此尊像を彫刻しまゐらす故に観谷聖輪の号ありといへり

千駄ヶ谷八幡宮　同所一丁許西にあり此辺の惣鎮守なり例祭ハ九月廿七日なり別当ハ真言宗高雲山瑞円寺と号す

鈴懸松　門前に松の老樹有り寛永の頃大樹此地に放鷹の時御鷹の鈴此松の枝にかゝりしとなり故に名とすと

社記云往昔此地深林の中に時として瑞雲現じける又或時碧空より白気降りて雲上に散る村民怪みて彼林の下に至るに忽然として白鳩数多西をさして飛されり依て其霊瑞を称し小祠を営み名つけて鳩森といふ貞観二年慈覚大師東国遊化の頃村民等大師に鳩森の神躰を乞求む依て宇佐八幡宮城州鳩の嶺に移りましし古をおひて神功皇后応神天皇春日明神等の尊躰を作りて添て正八幡宮と崇めしなり遙に後久寿年間渋谷正俊領地に鎮座の御神なるを以て金王丸生前随身の本尊恵心僧都の作の弥陀如来の像を本地仏として社を



千駄谷観音堂

千駄ヶ谷八幡宮
ひかり
富士
浅間社
いなり
表門
白山
鈴かけ松

造営して此地の生土神と称しまつりしより霊應ハ照々として
日ゞ新なり（南向亭云く當社の前路ハ鎌倉街道の旧跡にして今も鎌倉路と字せり青山の原宿より此地をへて大塚へかゝりしことを北条家分限帳嶋津孫四郎所領の内に千駄ヶ谷の名有）

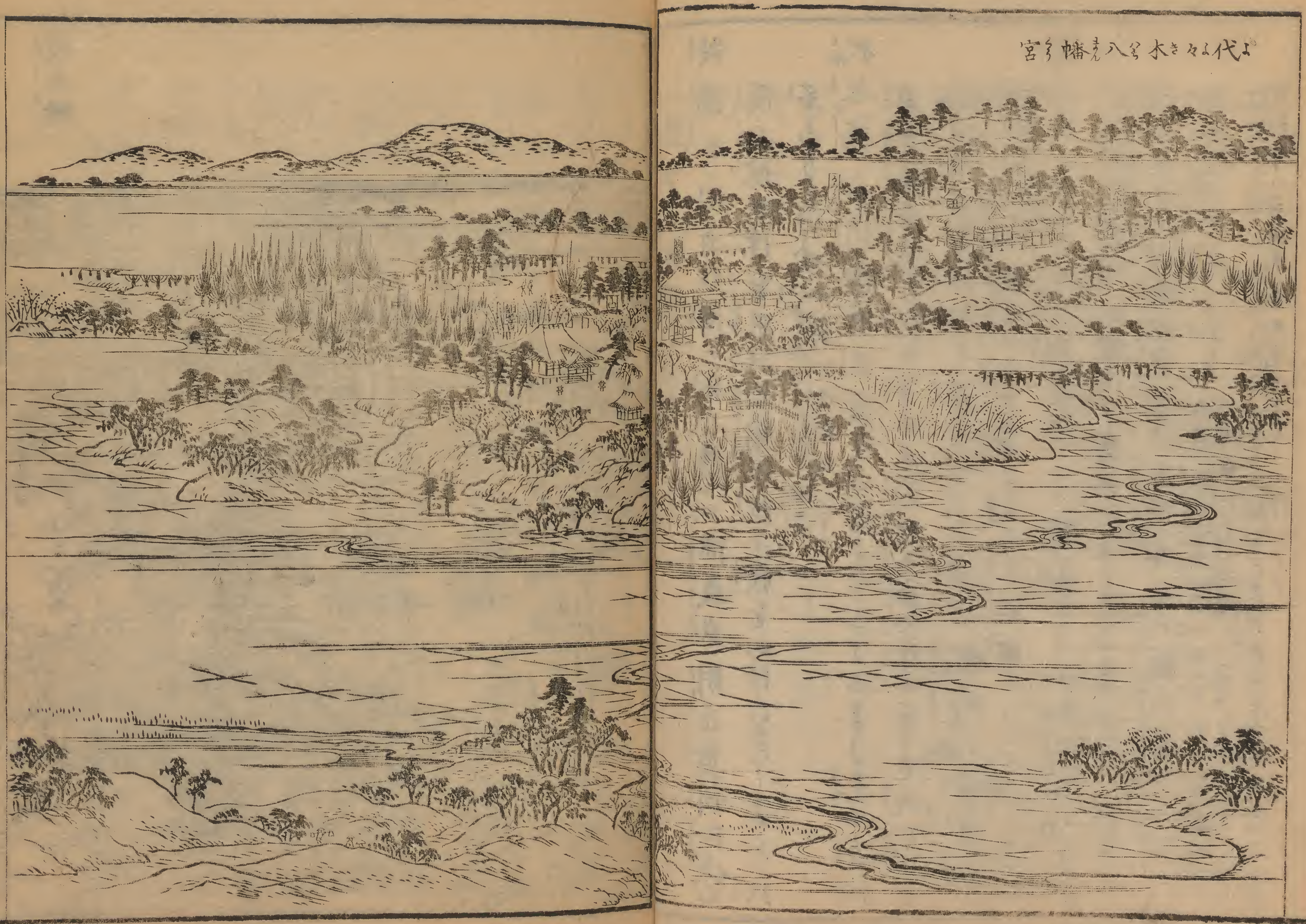
代々木野八幡宮　同西の方代々木野にあり（代々木野も武蔵野の中なり）祭禮ハ九月廿三日に修行す別当ハ天台宗にして宝珠山福泉寺智妙院と号す（古ハ知明に作る）

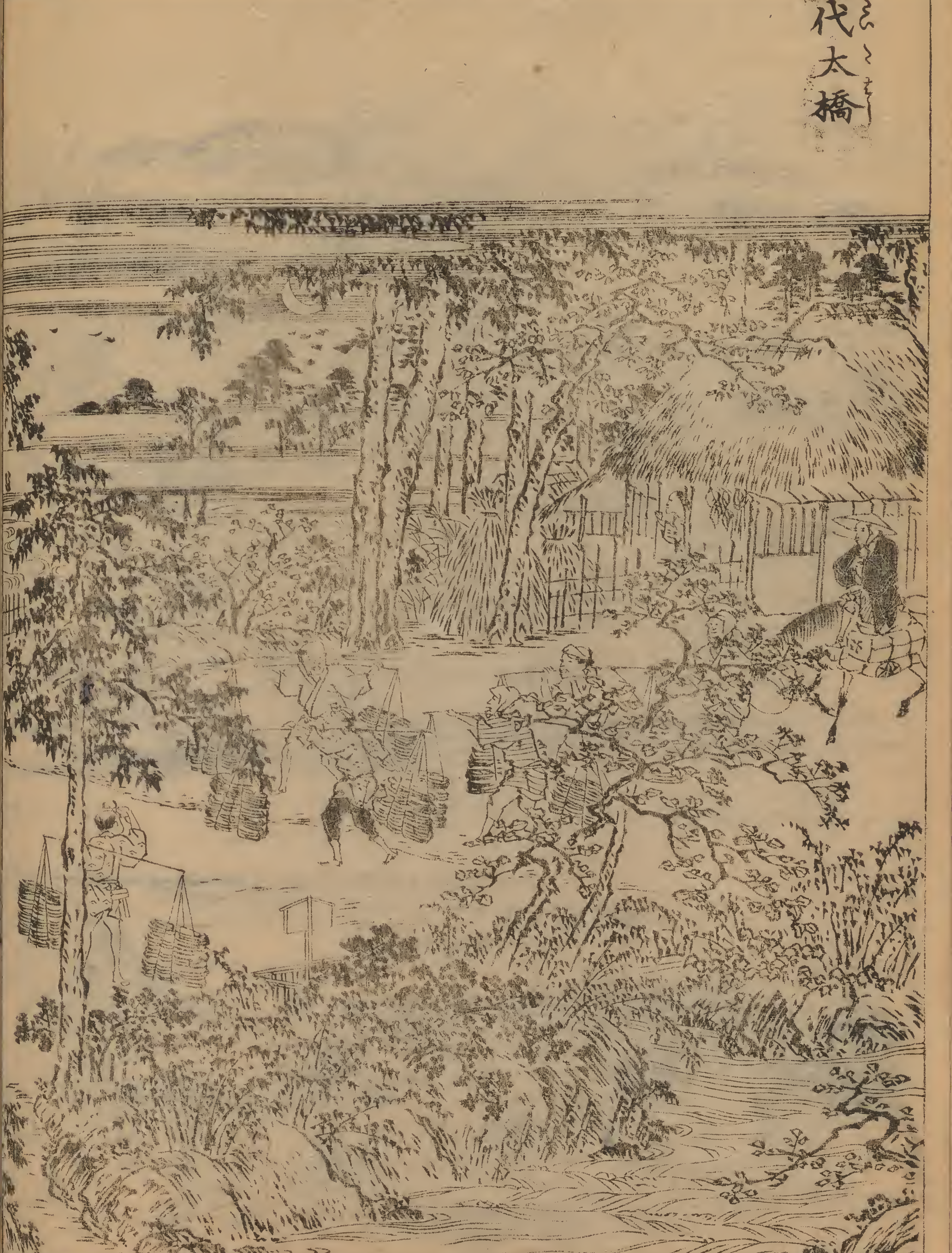
相傳ふ當社ハ往古源頼家公の旗下なりける近藤三郎是茂の家人荒井外記智明といへる者故ありて相州を退き此代々木野に蟄居し宗友と名を改め年月を送まり八幡宮ハ本國の産土神なるにより常に尊信怠る事なし然に建暦二年八月十五日の夜夢中に鶴ヶ岡八幡宮の霊示ありて宝珠の如き鏡を感得す依て同九月廿三日此地を求めて荊棘を拂ひ小祠を営みて初て鶴ヶ岡八幡宮を勧請しまつるとなり

鞍懸松　同所の岡に在り傳へ云源義家朝臣奥州征伐の頃此地に陣を取此松樹の枝に鞍をかけられしより此名ありといふ（江戸鹿子といへる冊子には頼朝卿とす）

代太橋　甲州街道荻窪の立場より三丁あまり先の方松原赤堤泉廻り代太等の五箇村入合の辻にありて曲折せる所の道路を横切て流るゝ小川に架す（此所を八道より左に添て流るゝ橋より右に添て流るまで）橋下ゆく水流橋上に土を覆ふ故に其形顕はれず（此橋下を流るゝハ玉川の上水なり）左右に顕れぬ

高井戸　此所も甲州街道にして驛舎あり（四谷内藤新宿より此所まで一里廿五丁上石原へハ二里一丁あり八王子へも此所を經り）此所ハ下高井戸にして上高井戸ハ此所より西にあり小田原北条家の分限帳に大橋氏某の所領に無連高井堂とあり（無連ハ無礼にして高井堂ハ此地のことをいふ道興准后の廻國雑記に小堀兼の井といへる事見ゆ今ま高井戸といふとありて堀兼の井のあとなども此地にありや今まさだかならず和歌の事ハ紫の一本堀兼井の条下に詳なり）


代々木八幡宮



鬼子母神 下高井戸の道清月山覚蔵寺といへる日蓮宗の寺に安置す鬼子母神の靈像ハ宗祖大士の作にして佛像の脊に建長五年癸丑八月八日日蓮刻之とあり

縁起曰文永八年九月十二日日蓮大士相州龍口におゐて誅に伏さんとせられし頃一人の老女ありて胡麻の餅を供養せり大士歓喜のあまり建長五年の夏始て妙法蓮花経の首題を唱へ給ひし附属宣流布の初穂の為自彫造ありし法流守護の鬼子母神の靈像を彼老女に授与ありしか然に餘参福田村といへる地に安田武左衛門といへる農民あり則老女が裔にして家に此靈像を傳へ持ちしに享保十八年癸丑五月此霊像俗家にありて法味に遠しきう方に出家の法に随ふべき旨靈示あり依て當寺十世の住僧日曜師鎌倉松葉谷妙法寺に在せし頃彼武左衛門此霊像を携へ来り来由を告て日曜師に附属せり然に日曜師當寺の破壊を歎き寺院再興の為爰に移住せられし頃當寺へ遷しまゐらせしと云

布多里 今所謂布田邑是なり此地ハ甲州街道にして上下と分れたり 布田或ハ布多に作る此地布多天神社の御制札にも補陀郷とあり石原上下國領等を合せて布田五宿と称へ

武蔵國風土記曰 多磨郡
爾布田或新田公穀三百七十二束三字田假粟
二百十三丸三字田
貢薇蕨諸草菜及鱠魚等
亦布田川出鮎鮒鯽等云云

布多天神社

和名類聚抄曰
武蔵國多磨郡 新田 尓布多 云云

按に風土記にいふ所の爾布田及ひ和名抄に載る所の新田共に此地のことを云なるへし後世上略して尓布多を布田ととなへきたれり又風土記に尓布田川の名あれとも今志るへからす

万葉

多麻河泊尓左良須氐豆久利佐良左良尓奈仁曽許能兒乃巳許太可奈之伎

家集

身作やさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉河の里　定家

按に万葉集多磨を多麻に作り布田も又古ハ布多とす往古麻の布を多く産せしゆへより仮字にハあれと其意を含みて麻布を作るなるへし又當國の府ハ此地より西南にあたりて遠からす往古ハ毎國朝廷へ調布を貢せしめ國史等に詳なり風土記多麻川の条下に里人調布を作り内蔵寮に納むとあり然れハ此國より貢する所の調布ハ當國に産するものを集めて此川辺にて晒して府に携へ國司の検へ出せしなるへし依て多麻川の水流を考ふるに府中の辺より水源ハ河瀬狭くして巨石多く布田より下流ハ漸く海に近きゆへに潮の盈虚ありて調布に便宜よろしからんたく此布田の辺の河瀬の廣狭水流の緩なる実に布をさらすによろしと思はるゝ故に合せ考ふるに此辺其実蹟なるへからん又云毎歳三月の頃より七八月に至り此辺の童児等唄ひ踊り歩行ことあり其形状及ひ唄ひ物の詞章を聞に布を晒す体あり

又云
此川の流のすゑハとゝろきて布を流さハ海まても
あのまハヤレ紺屋の手ヤレいつもかはらぬ紺便をさへしらぬひ
いつ深くさへむひ瀬に住くるもさうずも嬉しらしめうえぐるさふ
浮気男がまろふへハまふこそ末の月夜をむひそよ

又云
玉川の鶴か二三羽まひ日ひわち通ひや山越く峯を越て
ころか川瀬に布の用をしあけさうつろしき紺とおうこの
きめ見てさうすし

此唄ひけの古をおもひあはすれば足ありと附て云 此地より西の府中までの間に染屋邑と称する地あり 是も古へ紺屋の家多くありて調布を染しと此名あるよしん 按するに東鑑建久六年七月廿八日の条下に武蔵國深殿別当安房上野局に仰付らる祭所別当のことハ近瀬局これを司るとあるも此辺のことをいふなりん 又云 和名抄布の三字を用ゆると云く 調布多麻郡と訓す 同書に今按に俗に手作布の和名 乃沼能とありて貢にあてし布のことをいへり

布多天神社 上布多驛舎の辺より右の方四丁ばかりにあり 別当ハ真言宗にして廣福山栄法寺と号す 浅尾王禅寺に属す 祭禮ハ隔年九月二十五日に修行す 當社祭神詳ならず 今當神を相殿に勧請して二座とす 當社昔ハ多磨川の岸頭にありしが洪水の難に罹るの後今の地へ遷すといへり 今も其地に元天神と称して小祠を存せりといへり

延喜式神名記曰 武蔵國多磨郡
布田天神社 云云

虎柏神社 同所北の方十丁計を隔て佐須村にあり 佐須ハ古へ當社の神職の姓なりしを後地名に呼かへしとなり 今も社前に古松二株鬱叢と聳えり その遠裔此地の里正にして連綿たり 九月十三日を以て祭祀の辰とす

武蔵國風土記曰
武蔵國多磨郡柏江郷 圭田七十三束 所祭大歳御祖神也
崇峻天皇二年己酉八月始祭事有之 云云

延喜式神名記曰 武蔵國多磨郡
虎柏神社 云云

虎柏 按するに深大寺縁起に満功上人の祖母の名の虎と祖父の住し柏野の北の名とをとりて虎柏の神社ありといへるハ是非をしらず 柏字古ハ栢に作るを後世字形相似たるを以て今ハ栢に従ひ 栢ハ誤まりなり 又當社の前にある所の神田ハ古社領なりしとて今も宮田と称へり 風土記に挙る七十三束の圭田是ならん歟

虎柏山祇園寺 同所三丁ばかり東の方にあり 日光院と号す 天台宗深大寺に属せり 當寺ハ天平勝宝二年庚寅深大寺の満功上人開創せる所の佛域なりとぞ 本尊ハ立像二尺計の弥陀

青渭社
虎狛社

如来の木佛を安置す〈作者未詳〉本堂の向拝に掲る所の虎柏山の三大字ハ筆者をしらす

薬師堂 本堂の前右の方にあり薬師佛ハ立像御長一尺これもおなじく行基大士の彫造なりといへとも〈佛龕の内に弘法大師の真蹟の般若心経を収む〉此堂宇二百有餘年前までハ此地より東南の方三四十歩を隔て耕田の中にありしとなり〈今に古薬師堂と其頃墟いへる地題なり〉賊の為に佛器の類ひを奪れしかハ終に祇園寺の境内に遷せしとなり〈今薬師堂より一丁程南に薬師堂面と字して一反六畝程の除地あり鎌倉時世より前に附せる所なるよし土人いひ傳へたり〉

狛江入道旧館地 祇園寺より艮の方六七町を隔て二百歩あまりの岡なり空堀の形など厳然として残れり此地に入道崇むる所の稲荷の小祠あり土人里の稲荷と称す祠前樫の老樹一株六圍にあまるもの存せり〈東鑑に承元二年戊辰七月十五日狛江入道増西悪黨五十余人を率〉ゐて武蔵國威光寺領内に乱入し田を刈狼籍に及ふ由院主の僧圓海

諺葉とのみ云を擧られし歟本柏江に作るハ柏江を誤りしるなるへし又云
こゝに柏江入道と云傳ふるも此増西の事をいふなるへし又同書に建久元年庚戌
十一月七日二品入洛供奉の人名の内に駒江平四郎といふ名を注す
按ずるに續日本後紀に仁明天皇の承和十一年甲子五月武蔵國多磨郡狛江
郷より節婦を出すよしを載られたり本猪江に作るハ狛を誤れるものゝ
せり武蔵國風土記残編にも多磨郡の内に狛江郷といへる地名を収むこれ
和名類聚抄にも同しく郡の郷名に狛江とありて古万江と訓すされと此
地を今ハ佐須村と称し元ハ多磨川の北宇奈根村に隣りて駒井邑と
呼ふ地あり恐らくハ狛江の郷の轉訛ならん北条家分限帳に多波川の北
駒井本郷太田新六郎知行の内にあり此所ハ駒井の旧地なるへし

青渭神社　虎柏神社より北の方深大寺村の中にあり土人此地を字して天神か谷戸といへり祭神詳ならす世に青波天神とも称せり相傳ふ古ハ社前に湖水ありし故青波の称ありと社前槻の老樹あり數百餘霜を経たるものなり

延喜式神名帳曰　武蔵國多磨郡
青渭神社云云

按に神名帳に青渭とあるを今本阿遠伊と訓す土人云古當社の前ハ湖水満々たりし故に青波の称ありといへり今青波に作るも阿遠葉と訓するハ龍灘あるに依りて後同來龍灘神の祭所と崇めせしなるへし

狛江入道旧跡
祇園寺

青渭堤　青渭神社の辺にあり古ハ青渭の湖水湛へしを後世堤を切開きて水を乾し耕田となすといへり故に今此所彼所に六七歩或八十歩にあまれる塚のやうなるもの残り存して草樹繁茂せるハ其堤の旧跡なりとぞ

浮岳山深大寺　昌楽院と号す深大寺邑にあり（此所も佐須村と云　昔ハ柏野の里と号せしとなり）大古ハ法相宗なりしが恵亮和尚以来天台宗に改む　本尊ハ宝冠の阿弥陀如来恵心僧都の作なりといふ当寺ハ福満童子の宿願によりて天平五年癸酉に草創ある所の仏域なり（日本年代配合鈔に曰天平勝宝二年庚寅深大寺建立と云云）四十七代廃帝御宇に勅願所と定られしより平城清和両朝も又勅願所となしたまひしとぞ

元三大師堂　本堂の前左に傍てあり寺記に云　応和四年慈恵大師叡山に於て自彫刻なし給ひし霊像なりしを慈恵和尚と恵心僧都と心をひとつにし武蔵国深大寺ハ代々の帝勅願の地なりとて其霊蹤なり永く此尊像を遷し閑東の群生を化益せんとて寛和二年の春ここに安置なし奉りしより霊験あらたなりとて毎月毎の三日十八日殊に正五九月の十八日にハ邪業護摩供を修行あり遠近の遊郷の人群参せり　此日門前に市を立る

降魔尊像　先の霊像と共に叡山より当寺に遷座なしまゐらせしと云　霊験いちじるし

五大尊石　大師堂の北の山際清泉の中にあり此水旱魃にも減ずることなしといへり土人旱魃の年ハ此に来て此水を汲干んとす忽ち霈雨ありとぞ

要石　同じ泉水の中島稲荷の宮の傍にあり昔此山崖なりと崩るること屡なりしかバ時の寺主祈念して此石を建て要石と号くるとぞ云

鐘楼　大師堂の後の峰上にあり

武蔵國多東郡深大寺
奉治鋳撞鐘　長四尺三寸　口二尺三寸
右伏以當山蒲牢開基以来華更其數不一或雖右
鋳有破裂而無声或雖討得有薄界而不鳴爰緇紊
數華競勠力廼命鳧氏遂鋳鳴鐘當知三宝垂感諸
天降臨仰願　皇風永殤佛日弥明伽藍鎮静法輪
常轉更乞諸檀施主二世善願一切成就仍昭銘功
徳其辭曰
寺号深大　山名浮岳　新鑄鳧鐘　声形卓犖
百千万劫　定期遐邈　驚起塵夢　消除煩濁
滅罪生善　令人正覚
永和二年丙辰八月十五日　大工山城守宗光
大行事院主法印權少僧都辨運
別當前大僧正法印大和尚位守慧

亀島辨財天祠　門前左の方の池の中島にあり縁起に所謂福満童子が背負て渉せし霊亀をもして後に満功上人辨天に崇られしと云

深大寺

毘沙門天吉祥天社 昔ハ各別社にてありしを後弁天の相殿に合祭すと 福満童子ハ毘沙門天の化身吉祥天ハ縁起に所の童女とあらめ祭るところなりといへり

深砂大王社 社大門並木に相對す 縁起曰天平五年癸酉満功上人此地に當社を営みて深大の二字を採て寺号とし一字を草創せしとぞ

東照大権現宮及び八幡八剱権現等を相殿とす

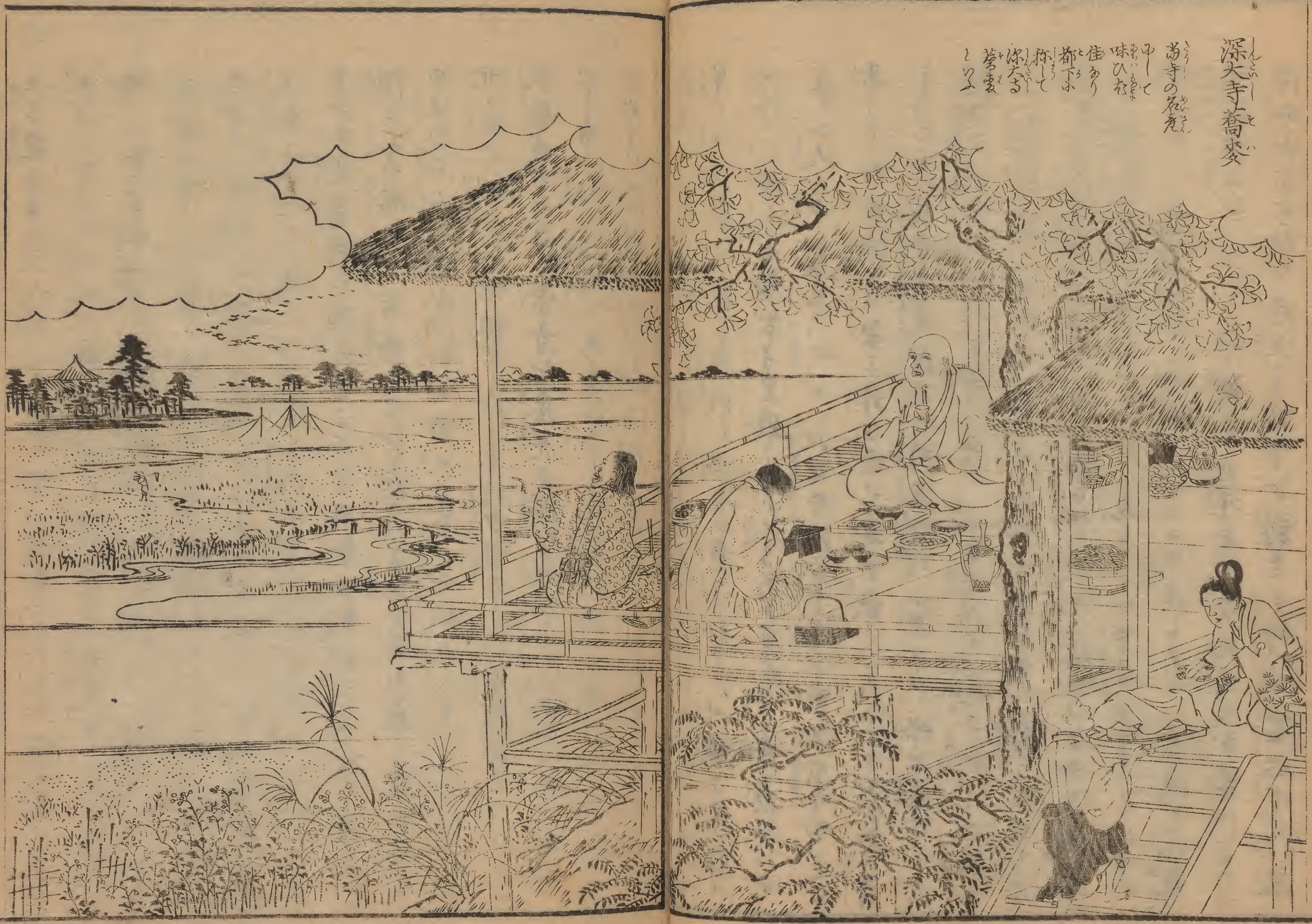
深砂大王影向池 社の後にあり往古深砂大王影向ありし旧跡と云ひ傳ふ池中一ツの霊石あり

剱立石 同じ池のほとりにあり往古恵亮和尚當國に勝地を求めんとし當國の國分寺に至り不動の利剱を虚空に擲ちしに此石上に立とゞまりしとありしより此号ありといひ傳ふ

福満童子祠 深砂大王の祠前右の方にあり

仁王塚 同社前の道を一丁許西へ登る坂を塔坂といへり往古塔ありしなといへり 二王塚と字す相傳ふ昔何某の二子當寺二王門の辺に遊ひてありしが其姿を見失ふ人々驚きさハぎ一山大に騒動すあくる日に當寺二王門の二王の其児の衣服の残り着たるをみてもとより兒を呑しによりて二王の像をこぼちて門を破却し土中に埋めしより二王塚の号ありといひ傳ふ

縁起曰 聖武天皇の御宇武蔵國多磨郡柏野村に猟師あり柏野村今佐須村といふ 名を右近といふ年頃山に入水に臨むて殺生を業とすある時やむごとなき女来りて妻となる名を虎といふ此妻常に夫をいさめて殺生をとゞむ右近ハ妻のいふに随ひ竟に狩漁を止む其後一人の娘をまうけかしづく事大かたならん早く生長なりて然に福満と唱ふる童子ありて此娘に逢初にけれハ父母大に怒りて賤しき人にあはせんこと本意なきをとて二人の中をさけ娘をハ此里の池の中島に家を営みて居らしむ福満ハ日毎に岸に至りて是を歎くといへどもかひなし昔をろしの玄弉三蔵渡天の時流砂川に至りかねて佛を念ぜしかハ深砂王現じたまひ川を渉したまひしことを思ひて一心に念じけれハ一の霊亀浮び出ぬ福満其甲に乗りて島に至り娘にあひけることを得たり父母後に此事を聞て神明の冥助あることを知て随喜して娘を福満に妻あはせけれハ竟に一人の男子をまうく父母の願ひによりて此児出家し満功上人といふ其後唐土に渡り六条の法相の旨を傳へて帰朝し天平五年癸酉父の本誓により深砂大王の社を建立し當寺を創む其時神霊水中に汎岩


深大寺蕎麦
当寺の名産にして味ひ殊に佳なり都下に称して深大寺蕎麦といふ

上に現じたまふ上人其尊容を摸しとゞめんとせられけるに衣木なし
然に七月七日玉川に霊木の流れ漂ひあり則是をもつて薬師
佛三軀を彫刻し一軀を當社に納む 餘二軀ハ下野國日光山及び出羽國にあり 此由
叡聞に達しけれバ 發帝の御宇勅額所に定られ浮岳山深
大寺と震翰を灑き扁額をたまふ又貞観年間武蔵國司蔵
宗卿叛逆を叡山の恵亮和尚に仰らく乱賊降伏を祈らしめ
たまふ和尚當國の國分寺に至て不動の利釼を虚空に投たまひ
隕る所の勝地を道場とせんと誓ひたまふに遥に飛て當寺井泉
の辺の石上に隕ぬ此石を劔立の石と云依五大尊を勧請し此
地に於て秘法を修練せられしに行力空からず逆徒悉く降伏せり
依叡感のあまり當寺を恵亮に賜ひ此所にて七邑の地を寄附
なしたまふ 是を深大寺の七邑と唱ふ それよりして法相宗を轉し台宗にかへら
れ 護國安民の秘法怠ることなく関東第一の密場と

なりとぞ 背に八十二字の塔頭ありて大伽藍なりしが度々の兵火にかゝりて今ハ昔に違へり 其後野火の災に罹
りて灰燼となりしを世田谷の吉良家深く尊信して再び
堂宇を営み波平行安の刀等を寄附す 無銘長四尺五寸あり
繪巻物 并 詞書二巻 参議右中将藤原公尹卿筆
抑當寺ハ関東融通念佛最初弘通の道場にして慈眼
大師 大猷公の 上聞に達し奉り融通念佛百遍を
受させ賜ひ忝も結縁の名帳に御諱を記させたまひぬ
當寺融通念佛の縁起に詳なり 此念佛ハ大原の良忍上人現に如来の示教を受て弘通したまふ
所謂此法や或ハ十返百返乃至千返万返を日課とし我唱ふる所の称名の功徳を他の人の為とし他の人の唱ふる所の称名をハ自らの為として互に融通し自他平等に修するが故に其功徳廣大無辺なりとぞ 凡昔鞍馬山の毘沙門天王もこの念仏の結縁に入たまひしよしありし由其縁起にくはしく見えたり

深大寺蕎麦 當寺の名産とす 是を産する地裏門の前畑にして纔に八戔一畔程のよし 都下に称して佳品とす 然れども真とするもの甚少し 今近隣の村里より産するものおしなべて此名を冒らしむるといへども佳からず

難波田彈正城址 深大寺大門松列樹の東の方の岡を云 土人を

城山と呼ぶ今ハ麦畑とあるといへとも此所彼所に湟池の形残り此地ハ往古　清和帝の御宇蔵宗卿武蔵國司たりし時こゝに住せられたりし旧館の跡なりとぞ天文の頃上杉朝定の家臣難波田彈正忠廣宗松山の城の出張としてこゝに城廓を構へたりしとぞ

北條五代記曰く上杉修理太夫朝興の嫡男五郎朝定生年十三歳にして家を継武州深大寺といへる古城を再興し北条氏綱に向ひ弓矢の企ありけりといへる条下に（此陣ハ天文六年七月廿日なり）されハたけき中にもやさしき心ありその日のいくさに大将難波田おやかうしろをつかせ松山さして落行を北条方に山中主膳追かけ一首ハかくぞきこえける

あしからしよかれとてこそたゝかハめなと難波田のくつれゆくらむ

と俳諧躰によみかけしに難波田もさすかにかく武士にてくつわをひかへし

君をおもくおもふこゝろハまつの松山にのこりてたのみあり

我作りか似ぬ古今集の哥をとりあハせて返答ありいとやさしく駒のあしをやめく
まさりぬるかなともわけし主君朝定を館に残し置難波田かくれなハ松山ハ
浪もこえぬへし身を全く君につかふるを忠臣の法といへりあり作者とのひ功者とぞ
うけひきさあまる勇者ともとゝかへ中きえりき云々

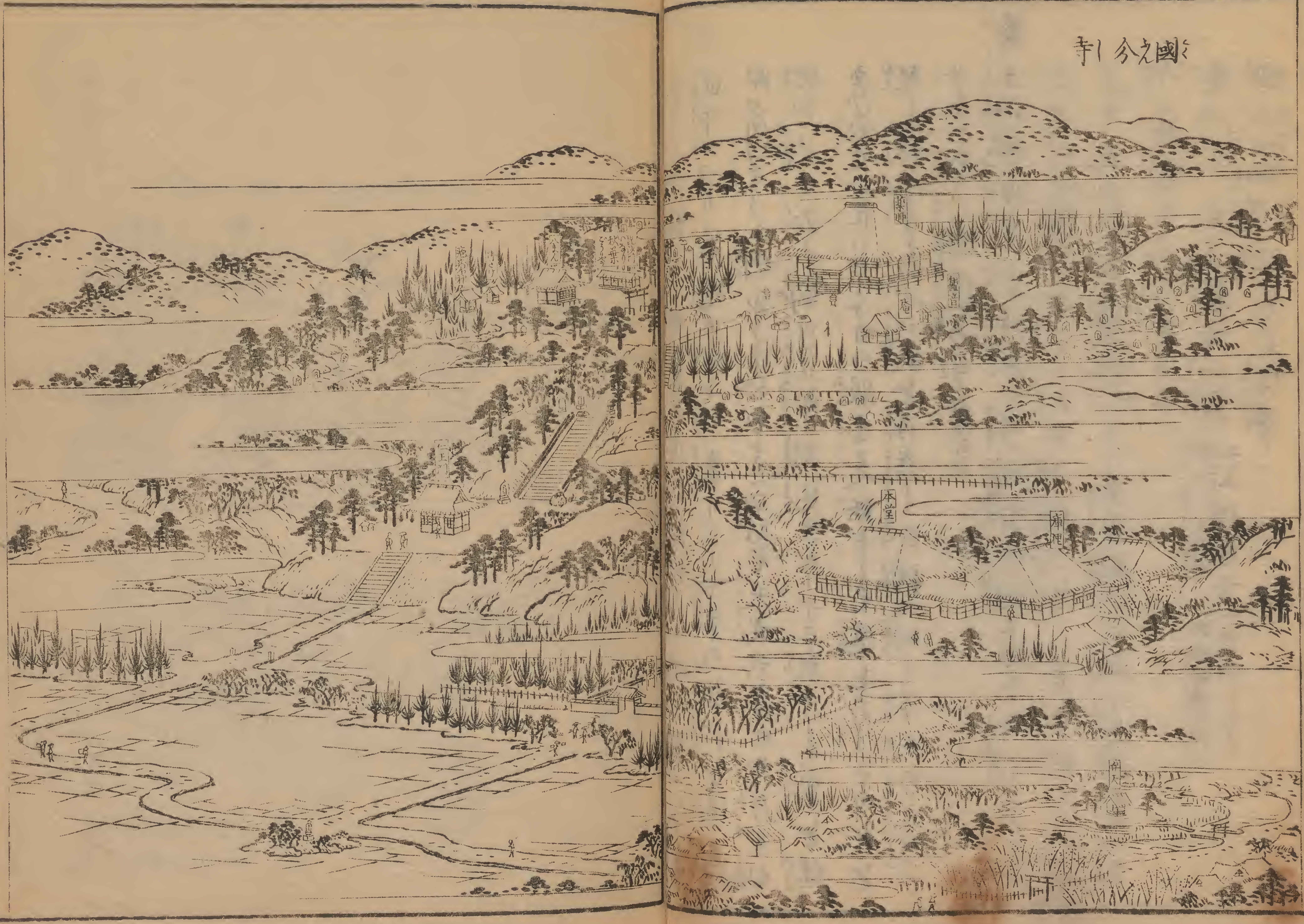
深大寺城跡　深大寺佛堂の後の方の山續にして其間六七丁を隔たり空堀或ハ柵門杯ありしと覺しき形今猶嚴然たり

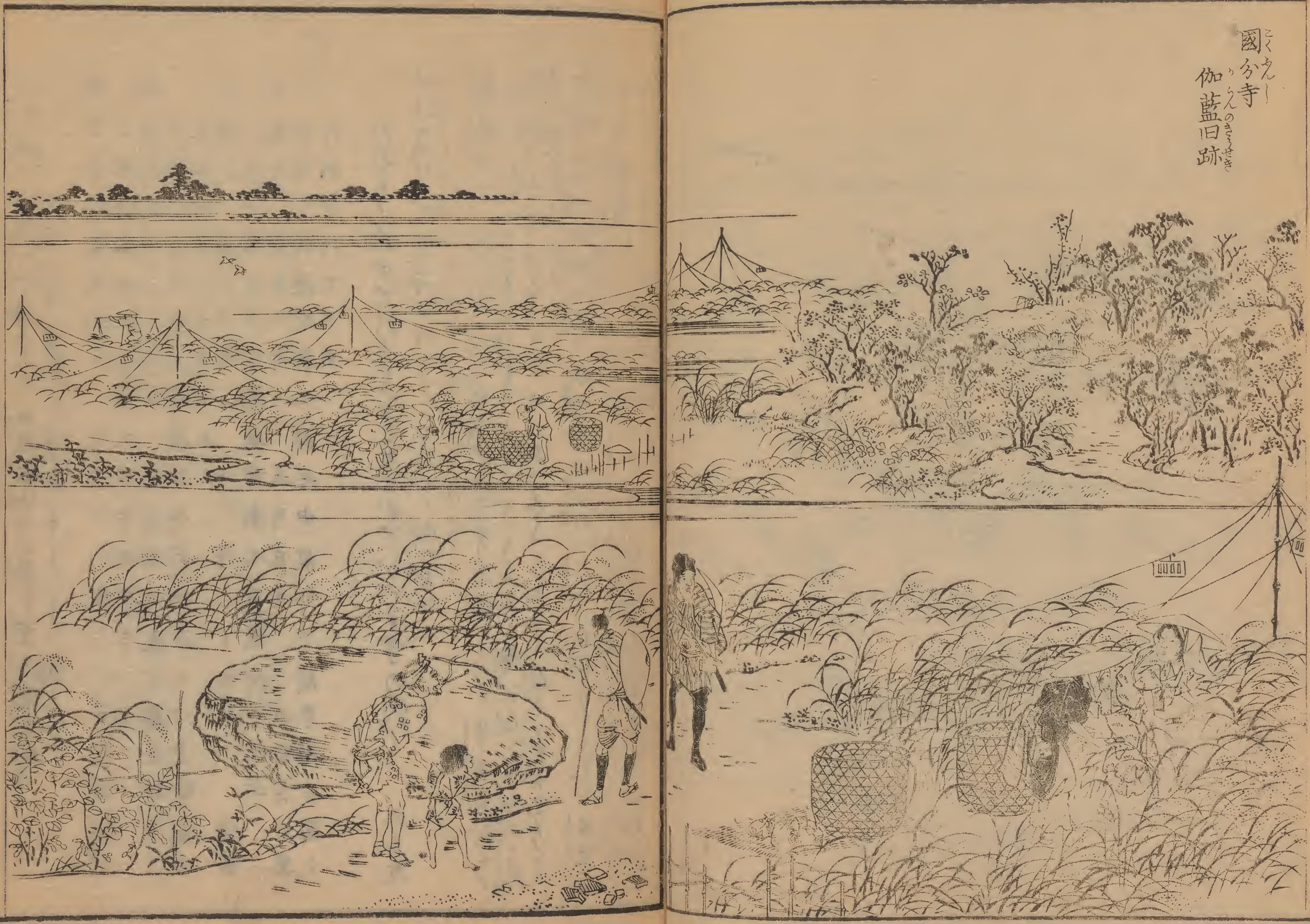
北条五代記に大永四年の頃氏綱江戸の城を襲ふ上杉直作ハいまた河越の城に引篭り十余年の春秋を送り迎へぬる内よりか例ならす心ちそこなひて天文六年の卯月下旬世を早く去る嫡男五郎朝定生年十三歳にして家を継あひぬてけれハ七々日の服忌さへ経ずして道をおこしなす兵を起し深大寺といふ古城を再興し氏綱へ向て弓矢の企あるなりとあるハ則此所のことなり

醫王山國分寺　家勝院と号國分寺村にあり府中より北の方十八町を隔つ當寺ハ天平年間行基菩薩草創ある所にして　聖武天王の勅願所なり中興開山を数心阿闍梨と号す今ハ新義の真言宗なり

薬師堂　本尊薬師如来　脇士日光月光十二神将の像ハ共に開山行基大士の作なり

額　金光明四天王護國之寺　深見玄岱筆


國分寺
本堂



國分寺伽藍旧跡

二王門

石階の中腹にあり金剛密迹の二像を置作者未詳 堂株ハ古のまゝにして舊地ハ半丁あまり南にあり

續日本紀聖武紀曰天平十九年十一月己卯詔天下諸國國別令造金光明寺法華寺下界

延喜式第二十六巻曰武蔵國正税公廨各四十万東國分寺料五万東藥師寺料四万二十東梵釋四王料七千七百東云云

東鑑曰建久五年十一月二十七日近國一宮并國分寺可修復破壊之旨被仰下云云

同書曰寛喜三年五月五日任綸旨於國分寺可轉讀最勝王經之由被仰下關東御分國々行然奉行之云云

たのもしな世をねがふとて宮まつて玉をかてる寺の鐘く　称名院

二王門旧跡

寺前半町あまりを隔て南の方の畑の中にあり礎石を存せり

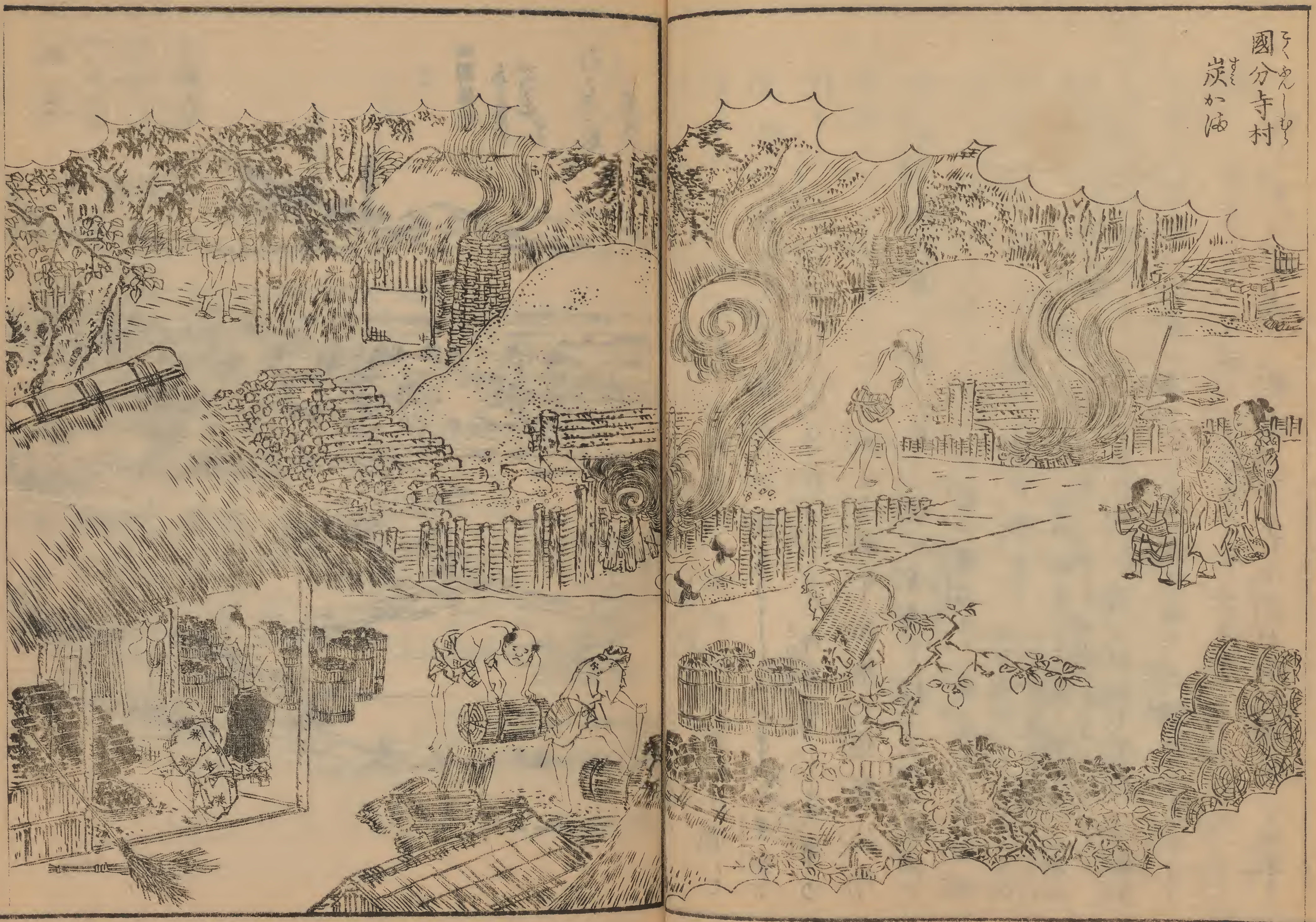
層塔旧跡

國分寺の址し東南半丁あまりを隔てあり草树繁茂せる所の跡なり方九尺あまり六角に礎を居えり往古の塔の中真を収むるのありとて中に径三尺あまり石にて畳める空穴ありて内に水をたゝへたり

古瓦

二王門旧跡の辺り数百歩のあひだ往の古瓦の破砕せるものあり皆堅密にして形全からずといへども文様奇にして國分寺の古大伽藍なりしを想像しつべし其地中より得る古瓦の中に武蔵國郡の名を刻せり

國分寺碑　藥師堂の前右の方にあり碑文ハ服元雄中英先生撰む
書ハ河保壽にして當寺法印賢盛建るところなり
當寺往古源頼義朝臣同義家朝臣奥州征伐發向の頃こゝを
當時へ入あひ其頃ハ盛大の寺院なりしと云あまたの星霜を
経て元弘の兵火に亡ひしを新田家にて再興ありしも兵革の
世終に古に復する事なし然るに宝暦年間權大僧都法印
賢盛衆緣を募て新に醫王閣を營建し傳ふる所の靈像を
安しく靈跡を表す今古伽藍の礎石のこる巖然として田間
阡陌の間に埋もれて懐旧の情を催せり
此寺前畑の中にかつてい塚
かうりけ場[illegible]と字せしは地
あり或人云かつていハ乞食かうりけ場ハ頭掛場なるへしと依て按に古へ合戦の
後敵方の首級を掛し地なるもハ其傍に乞食共住居してありしならん歟
冨士見塚　國分寺より西の方五町斗を隔つ此所に登れハ一瞬千
里殊に奇觀なり東ハ浩茫として限りなく天涯つらなり地より
接するを見るのミ中秋の夕月のあるきなそ草より出て草に入の
古詠に古を想像して感情少からす此故に幽人騷客こゝに来て


國分寺村
炭かま

戀ヶ窪
阿弥陀堂
傾城松
牛頭天王

回國雜記

戀の窪といふ所にて

朽はてぬ名のみ残れる戀の窪今はた問も契ならすや

道興准后

遊賞せり　高さ三丈ばかりめぐり五十歩ばかりあり

阿弥陀坂　冨士見塚より十三町ばかりを隔て恋が窪村の地北へ向ひて下る坂を云此坂の左に傍る岡に草庵あり土人阿弥陀堂と称す木像の阿弥陀如来を本尊とす　延享四年鶴心と云僧此草庵の廃たるを興す　土人云古の本尊は銅像なりしが今府中六所宮の社地にあるとの是なりしとぞ伝ふ往古畠山庄司次郎重忠此地恋が窪の駅舎にありし頃寵愛せし遊君ありしが重忠平家追討につきて西国へ出陣せらる然るに其後そのことのありて重忠討死しける由のありきかしけるを実としかの遊君歎きのあまり終に自殺しけるを後重忠ききてあはれみ彼遊君が節操を感し菩提の為に此阿弥陀堂建立し銕を以て弥陀如来の像を鋳て安置せしとぞ　図に云此地に道場畑と字せる地あり土人云むかし此地に無量山道成寺と号せる寺院ありしが阿弥陀堂も其境内にありし歟又云今府中六所宮の社地にありし銕の弥陀佛か重忠寵愛せし遊君の菩提の為に造立せし物なりとはいへとも其佛像の銘文年号等を考ふるに重忠とは時世大に違ひ誤なるべし猶六所宮の条下を見るべし

恋が窪　同所坂より下の低き地をいふ古へ東奥北越等の国々より京師及ひ鎌倉等へ至るの駅路にて其頃は遊女の家居ありていとにぎはひしとなり　此地に牛頭天王の叢祠あり竹林の中に凹なる地あるを古への北國街道の旧址なりといへり

回國雑記　恋が窪といへる所にて　道興准后

朽もせぬ其名ばかりは恋が窪今はたとふも契りならすや

傾城が松　同所艮の方八幡宮の社地にあり同じ程の古松二株雙立せり土人重忠が愛せし遊君の塚印の松なりといひ伝ふ然れども社地なるものを此八幡宮の神樹なるべし

武蔵野　南は多磨川北は荒川東は隅田川西は大嶽秩父根を限として多磨橘樹都筑荏原豊島足立新座高麗比企入間等すべて十郡に跨る草より出て草に入又草の枕に旅寝し日数を忘れ向へき里の遥なり抔代々の歌人袂をしほりしも

御入國の頃より昔に引かへ十萬戸の炊煙紫霞と共に棚引
僅に昔の蹤の残りしも兼應より享保に至る迄四度迄新田
開發ありて耕田林園となり往古の風光これなしされど月夜
狹山に登りて四隣を顧望すれバ往古の曠野蒼茫千里無限
往古の状を想像するにたれり　狹山ハ第四巻の中にも入たり

萬葉十四東歌

武蔵野乃宇良敝可多也伎麻左低爾毛乃良奴伎
美我名宇良爾低爾家里
武蔵野乃乎具奇我吉藝志多知和可禮伊爾之與
比欲利世呂爾安波奈布與
古非思家波素氐毛布良武乎牟射志野乃宇家良
我波奈乃伊呂爾豆奈由米
伊可爾思氐古非波可伊毛爾武蔵野乃宇家良我
波奈乃伊呂爾低受安良牟
武蔵野乃久佐波母呂武吉可毛可久母伎美我麻
爾末爾吾者余利爾思乎
和我世故乎安抒可母伊波武牟射志野乃宇家良
我波奈乃登吉奈伎母能乎

新古今
行末ハ空もひとつのむさし野に草の原より出る月かけ　摂政太政大臣

續古今
むさし野ハ月の入へき峯もなし尾花か末にかゝる白雲　通方

玉葉
旅人の行さきとほくなりまさるむさしのゝ末　右大臣

續千載
むさし野ハ行けども秋萩の花摺衣かぎりしられも　よみ人しらす

續後拾遺
末もまた末に八野をむさし野や草葉の露は限しらず　家隆

新續古今
むらさきのゆかりの色も問ひわびぬみな霜むすぶむさしのの末　定家

千五百番哥合
若草のゆかりにされハむさしのゝ草ハみなからなつかしきそする　雅経

夫木
花のさかり猶見し妻やこれならん一もと菊のむさしのゝ原　為實

囬國雜記　むさし野を出て殘月をなかめつゝ
ひまなしの明のこゝろむさし野ゝ郷　道興准后

桂林集　むさし野に長陣せし時やとりを出て
むさしのハ末も見えん時雨哉歳月を過し我ためならん　直朝

武蔵野記行
天文十五年仲秋の頃むさし野を見んと此年月思ひ立ぬるこころあれハ人〳〵あまたともなひて出たりけれハ中略むさし野をかり行ほとにまことにはてしなくひろし萩薄女郎花の露にやとる虫の音もあはれにきこゆるなり
むさし野といつくをさしてわけ入ん行も歸るも果しなけれハ　氏康
いにしへの野守の鏡もなかりけれハなり見えん
むかしさきのひとりをとゝめ置くへし
名にしあふ我世の中に人あれハ忘るゝもなき野の一本　同
武蔵野の古哥ハ萬葉集をはしめとし代々の撰集并餘哥合なとに見えし其の集にいとあまたあれハ枚擧にいとまあらねハたゝ世に耳なれたるをのみしるし侍る

武蔵野翁　翁ハ其郷姓詳らすたゝ郁芳門院の一萬士と云院崩せるの後齢二十九にしてく世を避て諸國を遊歴し此に止る菴を結ひ月に臥して武蔵野の廣を愛る六十年を經く西行法師に邂逅も一宿を投しく通宵古を談して淚を緇納に濺き曉に迨て別る　續扶桑隱逸傳の文意をとる

西行物語　さしていつくをさすともなけれハ月のひかりにまかせてゆくほとにむさし野にわけ入るに夜もふけ行まゝに月の光さえわたりて秋の野のけしき心ことなりむさし野の露をわけつゝ行ほとに萩すゝきのしけみの中に庵の有けるをたつねより見れハ草をむすひて柴の戸をさし入て住居をとゝめたる人ありあやしく思ひて立寄て見れハ年老たる翁ひとりありて法花經をよみけるそのこゑとうとくきこえけれハ立よりて庵のあるしに問けるハいかなる人にて此野中にすみ給ふそととへハ翁こたへていはくこれハ郁芳門院の侍にて侍りしか院かくれさせ給ひしのちうき世をいとひてこの野に住て年久しく侍るとかたるなり修攝其心とよみてすむ仙人なとにやと思ひしにこれハ九十餘にて八月十五夜名に高き月のひかりにそまよひ出けるなり

なきぐさにあらしあまたありまへに作りなれども こゝろひとにあくされ ころ
ろかなく物ものくまりす あるべきかしくあり〳〵 あらびのかたる人のかくくゝ
おハ歩るあらんと覚られども こゝにふゝめのなかしうさうめく 詠を 歌の和とりれ
このなりおのまのゝくさめかしくて かりまへりしら むさしの 野の名しるき
ふるさとふるく笑しよりもあつまにうへえてくらけ入 ほかにあらん こゝろへまり
人作るかもえるゝかのりとききく あるにを法をちたかりの 此をあかすくろかしへの
ゆかりもゆかしくあんとのへハむさし僧 郁芳門院の侍の一藤原 そへんり 云
女院らくれさせしまひてのち出家しく 酬ら源 郁芳 ぜし うら 仏道
終りのゆくりとあみにたちよりありとおりひて 廿九の年よりまとに六十余
年あみにて崩より されハ讃誦の経を方余部 かりと うら 侍
あさぶれも郁芳門院のゆゝりもよりくらぬゆくりかつきし八 ありかひに
かうりこけのゝくりとぞ志あり名物をしくおもえられども あうりさ
あるく詠まうしてくく
ゆへて歌さゝめくゝのゝぬ芳とありてんの月忙うけそこゝかゝん
ゆく生さき世にあらハぬハ世をも捨くおあきりの世わとさらにしりん
むさしのゝひとりの名あり〳〵けし 重井に月をすゝめしを

紫草　武蔵野の景物とす 和名類聚抄 無良散岐と訓す
紫ハ最上の色にして古歌にも見の色又位の色抔詠あはせ
より根を砕く染るに紫の根染又紫の根摺ともいゝり女に
比しては縁の色抔もいゝり江戸の紫染ハ最絶妙にして他邦に
比類なし 故に江戸むらさきの称あり

延喜式内蔵寮式曰紫草二萬二百斤武蔵國信濃國二千八百斤云云
同書曰民部省式曰紫草三千三百斤云云

古今　紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る　よみ人しらず
後撰　むさし野は袖ひづばかりわけしかど若紫はたづねわびにき　同
新勅撰　武蔵野の野中をわけて摘初し若紫の色ハかぎりか　九条右大臣
續古今　むさし野に生とし生るハ紫のゆかりにあらぬ草もなきかな　小町

逃水　武蔵野の景物なり 里老云く仲秋の末霖雨の頃此野を行に凹なる所に水湛へて通ひがたし 此所に除彼所にさけて行に道も定なし 凡草根沼のごとし 故に往来の人吟曲歩行を云ふ 此説信とするに足らず 或云天日快明の時曠野陽焔のきざすによりて遠く望めハ草の葉末の風に靡る水の流るゝごとく見ゆるを 依て其所と却ゆけば其辺へ至れども素水流あるにあらず さるを 八

府中
八幡宮
八幡

終に其水の原に至ることを得ず故に此名ありといふ其よく游しかたき

夫木　東路にありといふなる逃水の迯かくれても世を過るかな　俊頼

同　むさし野の草葉かくれに行水の迯かくれてもありとこそきけ　よみ人しらず

性靈集詠陽燄喩　遲々春日風光動陽燄紛々曠野飛擧體空々無所有狂兒迷渇遂忽歸遠而似水近無物走馬流川何處依　下畧

運敞註智論曰飢渇悶極見熱氣如野馬謂之爲水疾走趣之轉近轉滅走馬流川皆謂陽炎狀貌也

唐陸勲志怪錄曰深州東鹿縣中有水影長七八尺遂望見人馬往來如在水中乃至前不見水

周處風土記曰廣野中陽燄望之如波濤奔馬謂之水影此天地之氣絪緼盪潏回薄変幻何往不有

按に性靈集を餘前に載る所の書のうちも陽燄の義のみにて所なりとはいはざれど先の説をも思ひあはすへし　されど今ハ悉く民居又ハ田園に沿革して傍ところ跡をとるものなし

武藏野の勝槩ハ名にたかき中にも殊更に其地高く凡東西十三里南北十里あまりなりやあらん旧記に四方八百里に餘るなと書るハ筆のあやまりと云へし　天正以来江戸の地を以て御城営に定させられしより廣莫の原野も田に鋤畑に耕し尾花か浪も民家林藪に沿革して万か一を残せるのミ　元禄中柳澤侯川越を領せられし頃北武藏野新田開発によりて下宿といふ地の傍に原野の形勢を残さんと大野と号くる所に形よりそのさまを錦をあつめてまた千種の花を愛し虫の音を賞せんと中秋の頃幽情をもよふすの輩ここに遊へり　其路程江戸より十里あまり

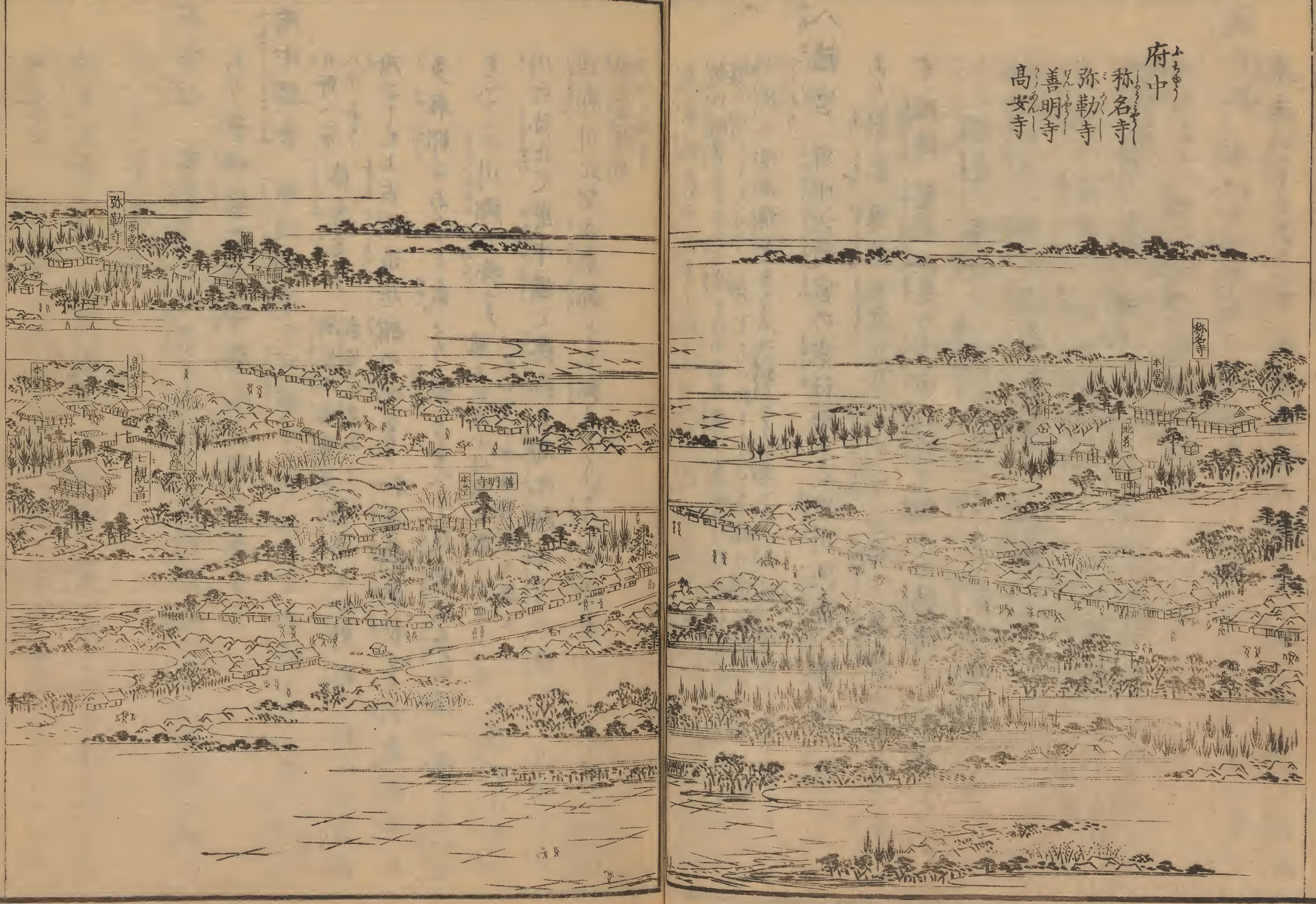
八幡宮

府中六所宮の末社なり　甲州街道八幡宿の道より左にあり祭る所應神天皇なり　六所宮の神主猿渡氏兼帯奉祀す　相傳　聖武天皇の御宇日域の國ことに勧請し営宮ありし所のその皆是八幡村の八幡宮といふ多くハ總社神祠の近きにあり　當社も古ハ本社禮殿並ひ建て荘嚴ことなりし其後漸く衰敝に逮ひ今ハ即茅宮小社なり　四十年あまり前まてハ老杉一株ありて空に聳え千歳の徴とも云へかりしかと其樹明和年間の暴風に吹折て今ハ其あとのミを存せり　又社境圃園の中に權ノ正といふ地名あり古の宮守居住の跡ありといへり

瀧の社

當社も六所宮の末社なり八幡宮より三町あまり東南の方にあり祭神倉稲魂大神なり社の傍に少し許の

府中
称名寺
弥勒寺
善明寺
高安寺



飛泉あり六所宮の御手洗池と称す毎年五月五日大祭の時神幸供奉の輩ハ五月朔日より此瀧に浸りて身を清め神事にたつさはると云

石塚社　當社も又六所宮の末社にして同所南の方代小川の辺にあり祭神磐筒男命磐筒女命二座なり

府中驛舍　甲州街道の官驛にして江戸日本橋より七里（布田より一里廿七丁 日野へ二里八丁あり）旅舍多し（新宿本宿番場宿等の名あり）舊名を小野縣と称す武蔵國府にして上古國造居館の地なり和名類聚抄中にも武蔵國府は多麻郡にありと載られ徴とすへし延喜延長の頃一変して此辺をへろゝ小川郷と称す（風土記曰小川郷公穀二百六十七束三毛田貢八松桃戟靴之類云々）又其後小野小川の称止て府中領と總称す尚此郡玉川を境とし川南を多西郡川北を多東郡とも称しより古文書にみえたり（常陸對馬長門越前越後皆府中と称せり）